

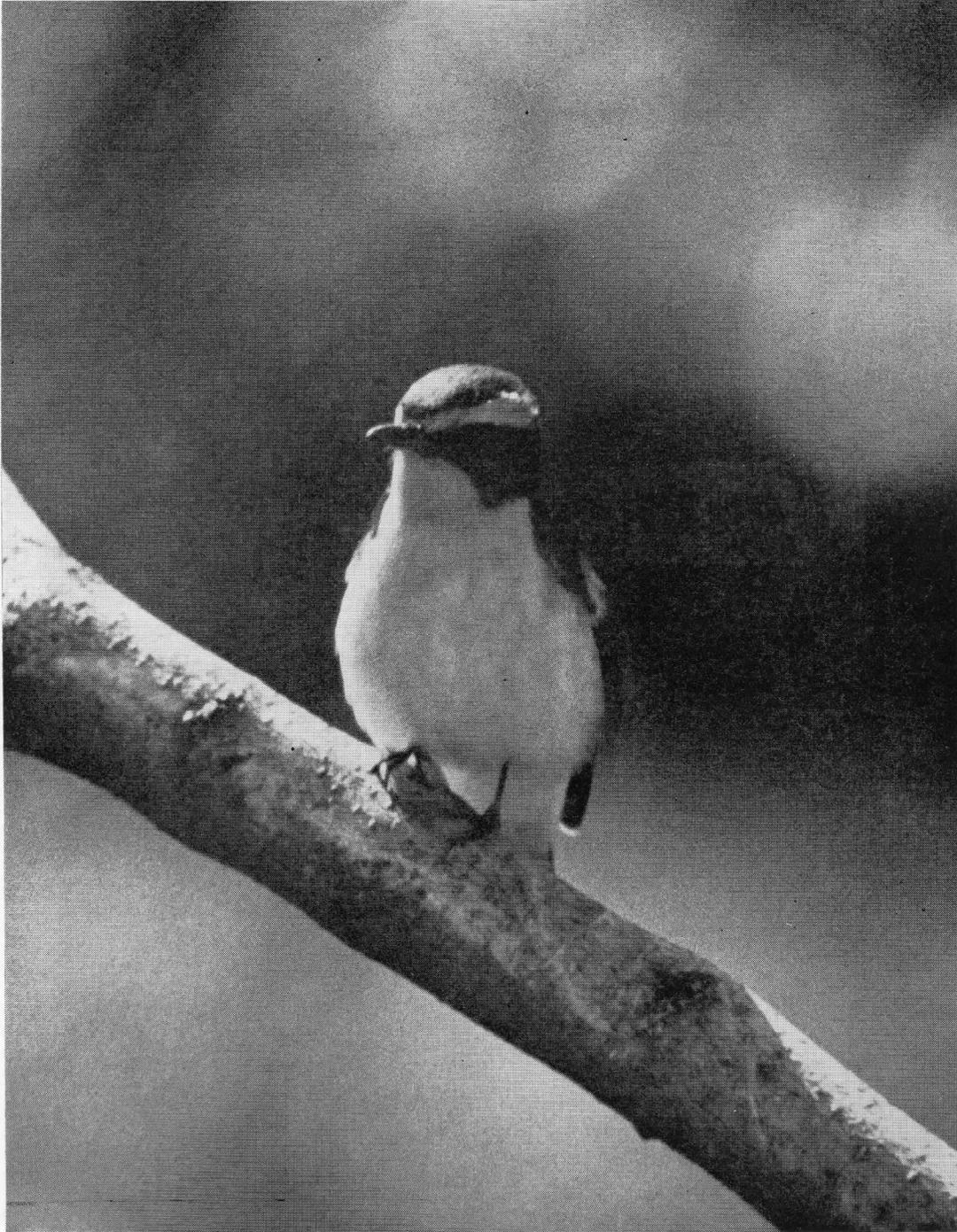
野鳥たより

—北海道—

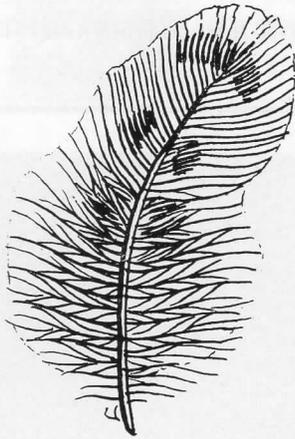
第37号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和54年10月25日



キピタキ 昭和53年6月 撮影 薄井五郎



探鳥地案内……………平井さち子……2
 真駒内保健保安林及びその周辺の野鳥について……新妻 博……3
 <抄訳>立枯れ木の除去と鳥の反応……………斎藤新一郎……6
 えりものチシマシギ……………佐藤辰夫……7
 えぞ鳥獣夜話……………安田 鎮雄……8
 探鳥会ほうこく……………9
 札幌市内でチゴハヤブサが営巣……………11
 探鳥会案内……………12
 鳥民だより・編集後記……………12

探鳥地案内

千 歳 川

(さけます孵化場周辺)

◆位置 千歳市 千歳線千歳駅より西へ約5km

◆概況 原始の風貌を残している天然美林をくぐって流れる千歳川は、支笏湖を源として1年を通して水温8℃を保ち、流域の動植物の生活を豊かに保持している。

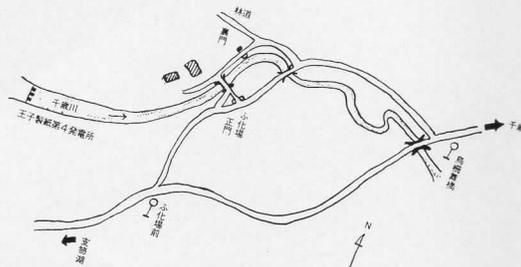
◆交通 中央バス(千歳空港↔支笏湖畔)

うさくまいばし
鳥柵舞橋で下車。

◆探鳥コース バス停よりすぐ北側の小径に入る。約1.5kmで水産庁さけますふ化場千歳支場の裏門。途中左手は涼やかな千歳川、右手はヤナギ、ヨモギなどの草地と、カラマツの人工林が続き、オオジシギ、アカハラ、ホオジロ、ベニマシコ、ノビタキ等の陽気な世界が展開されている。ふ化場内では、ハクセキレイ、キセキレイ、セグロセキレイや愛嬌のあるカワガラスにも逢い、正門から緩やかな坂を上る。カツラ、セン等の古樹や、ミズナラ、ニワトコ等の森をぬけると、

バス停「ふ化場前」に出る。途中、ツツドリ、トラツグミ、オオルリ、キビタキ、キツツキたちの麗姿、美声を満喫させてくれる。ふ化場前で下車し、逆コースでもよく、僅かに3km程のコースではあるが、運がよければ、クマゲラ、ヤマセミ、カワセミ、アカショウビン、オンドリ等にも逢える筈。山の鳥、溪流の鳥、草原の鳥、と幅広く40～50種は見られる「贅沢な探鳥コース」ということができる。

◆地図 5万分の1千歳。



真駒内保健保安林及びその周辺の

野鳥について

新妻 博

〈真駒内の歴史と自然〉

真駒内（札幌市・南区）は、かつて北海道開拓使時代から種畜牧場として著名な所であって、札幌創建のための建築用材を伐採し製材するなど、早くから開拓された場所である。また戦後は、外地からの引揚者のために開放するなど開拓は相当に進んで居り、その後は農地を放棄離農する者が多く出たため、地区の奥地はかなり荒廃している。さらに旧種畜場は戦後直ちに駐留軍のキャンプになり諸施設が完成、牧場の一部はゴルフ場となり、米軍から返還後もゴルフ場は数年運営された。米軍引揚げの施設はその大半を自衛隊が引きついで、特車など並列する演習場、宿舎が建ち並んで、昔を偲ぶ面影はさらない。また、時には博覧会場となり、冬季オリンピック会場となって、アイス・アリーナをはじめ、選手村がつくられ、のちに一般に分譲住宅として開放されたことは記憶に新しいことである。そして、現在は一般個人住宅を含めて、道の総合プランによる一大団地が完備され、静かで美しい好環境のベッド・タウンが現出した。完成当時に植えられた樹木も10数年を経て、白樺・白楊はおどろくばかりに成長し、とくに遊歩路、団地内の各所に配置された大小とりどりの公園、住宅の庭に植栽されたナナカマドは大きく生長して赤い漿果をびっしりつけて、冬鳥の渡来を待つ晩秋、初冬の情景は、市内のどこにも見られない美しさである。このように自然は古くから今日まで開発され、再造成という過程を示しているが幸い、西方を豊平川、そして東は精進川の清流によってとりかまされ区別されている真駒内には、二次林ながら通称サクラ山の保健保安林があり（昭和45年10月22日指定）、この辺り一帯、緑ヶ丘鳥獣保護区が設定（昭和45年10月1日指定）されて居り、野鳥棲息の環境としては十分ではないまでも、恵まれていると言えよう。

保安林の面積は約131ha、位置は市営地下鉄道シェルター及び真駒内駅、その延長上の留置線に沿った、旧定山溪鉄道線の東側に密着、というよりは、その一部となって居り、朝の出勤時には、プラットホームに立つとコルリやセンダイムシクイ、アオジのさえずりがきこえてくることもある。主な植生は、ミズナラ、シラカバ、モイワボダイジュ、ホオノキ、カツラ、ヌルデ、ハリギリ（センノキ）さらにヤナギやカエデの類、つる性のヤマ

ブドウ、サルナシ（コクワ）、ツタウルシなどが多く、林床にはチンマザサ、クマイザサが茂り、マイヅルソウ、チゴユリ、エゾタンポポ、ツルリンドウやラン科などの草木が多く、ゆたかな林相をなしている。ただ前述のように二次林のため、わずかに伐採をまぬがれた大径木が残されているばかりである。そのためか、野鳥の種類も野幌自然休養林などにくらべて数も少く、種も偏在の傾向が見られる。

〈この地区の鳥相〉

「都市林の環境保全・保健休養的機能整備構想」＝財団法人・北海道造林技術センター発行（昭和47年）によれば、真駒内保健保安林の生息鳥類は、15科、26種があげられているが、筆者が1971年9月から1979年8月に至る8年間に於て観察することの出来た野鳥は、この保安林内に限定しても、はるかに上廻る数が生息し、あるいは一時的に休息して渡去するものなどを加えると3倍以上になる。しかし、当時の調査によって記録されているガン・カモ科の、コガモ、マガモ、ヨシガモ、カルガモ、クイナ科のバンなどは保安林周辺で観察されることはなく筆者の記録にはない。これは周辺の開発がすすみ、河川改修が急速に進捗したことによるものであろう。環境変化（自然破壊）の指標鳥とされるカワセミの出現もめっきり減少して、1974年、75年、さらに78年に真駒内川の清流で観察されたが、そのうち確実に繁殖したと思われるのは1974年だけである。またその頃よく見られたヤマセミも78・79年は姿を見ていない。これは営巣地であった藤野地区の河川改修の結果であると推定されている。

〈観察リストについて〉

筆者はこの道の専門家でなく、学生でもないもので、いわば一種の日曜大工であって、探鳥に当てはめて言えばサンデー・バードウォッチャー（日曜観察者）ともいうべき、ズブの素人。気ままに双眼鏡を肩にぶらついている野鳥愛護会員にすぎない。それゆえに、季節的に観察が片寄ったり、夏鳥の渡来時には初認記録に熱中した時代があったりで、夏の暑い盛りなどは、とんとまけてしまっている。秋・冬についても調査に大きなムラがあるものと承知している。その点、どうかご了承を頂いて別表のリストをごらん下されば有難い。

リストに記載のものは、31科、86種であるが、もっと

精密を期して行動すれば、さらに種類は増加するものと思っている。なお、ワシタカ科のものに3種ほど確認できなかったもの、そのほかに若干の疑問のあるものなどがあつたが、これは省いてある。真駒内地区の特徴をあげると次のような概況になる。

1. コルリの個体数が例年多いこと。
2. メジロがこの数年来、急に増えている。
3. ゴジュウカラ、コゲラがきわめて少い。
4. キレンジャクの渡来は年によって大きな数的な差があるといわれているが、余りそれがないこと。
5. クロツグミ、アカハラなど森林性のものが住宅地区でよくさえずり、繁殖をすること。
6. ササの花が咲き結実枯死が2年ほどつづいたが、笹原を好むヤブサメは、相かわらず個体数の密度が高い。
7. 草原性のシマセンニュウ、マキノセンニュウはもちろんアカモズ、シマアオジ、オオジュリン、ノゴマが出現しないこと。
8. エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリの記

録はあるが、これはほんの立寄り程度であり、ノビタキも早春見られるが、これも適当な土地に落つくまでの腰かけである。

9. ハリオアマツバメの群翔、低空飛行が7—8月に市街地、住宅地でたびたび見られる。
10. 真駒内にかかわる三本の川（豊平川、真駒内川、精進川）のうち、精進川を除き、イソシギが異常に多い。
11. 珍しい例として1974年5月、サンショウクイが出現。この年、旬日後に野幌でも確認（百武充氏）別の年に根室でも記録がある（高田勝氏）。
12. 真駒内川にイソヒヨドリが出たのは、渡りの途次の休憩であろう。美しいだった。
13. 1979年5月31日、真駒内公園にあらわれたイスカは成鳥、亜成鳥を交えた30~50の群れで♂♀半数ぐらい。ハルニレの子実をさかんに啄んでいた。珍しい例と思う。

☎061-11 札幌市南区真駒内

野鳥観察リスト

- ◇ 観察地 真駒内保健保安林とその周辺
- ◇ 期間 1971年9月~1979年8月
- ◇ 繁殖状況 ●印は地区内 ○印は地区週辺で繁殖が想定される

科名	種名	期間	繁殖	備考
サギ	アオサギ	6月		上空翔ぶ
ワシタカ	トビ ノスリ ハヤブサ	周年 1月 1月	●	きわめて稀
キジ	キジ	周年	●	
シギ	イソシギ ヤマシギ オオジシギ	4月~10月 4月~8月 4月~7月	● ● ●	
ハト	キジバト アオバト	4月~11月 6月~7月	● ●	
ホトトギス	ジュウイチ カツコウ ツツドリ	5月~7月 5月~7月 5月~7月	○ ● ●	幼鳥9月
ヨタカ	ヨタカ	5月~7月	●	
アマツバメ	ハリオアマツバメ アマツバメ	5月~10月 5月~10月	○ ○	
カワセミ	ヤマセミ カワセミ	4月~9月 4月~5月	○ ●	
キツツキ	アリスイ ヤマゲラ アカゲラ コゲラ	4月~7月 周年 周年 周年	● ● ● ●	

ハタオリドリ	スズメ	周年	●
ムクドリ	コムクドリ ムクドリ	4月～8月? 周年	● ●
カラス	カケス ハシボソガラス ハシブトガラス	周年 周年 周年	○ ● ●

〈抄訳〉 立枯れ木の除去と鳥の反応

齋藤新一郎

立枯れ木は、(立ったまま枯れている木)多くの鳥に営巣、ねぐら、採食、食物貯蔵、ほっつき歩きなどの場を与える。そして、立枯れ木を利用する巣穴鳥にとってそれらの除去は繁殖の制限因子となってしまう。

調査地50haは(これについて北アメリカのアリゾナ州で調査が行われたが)ポンデローサマツ主体の森林で、次の3つに区分されている。プロットAは19haで、42%の伐採および立枯れ木(12本/ha)除去をした。プロットBは15haで、52%の伐採をし、立枯れ木(15本/ha)を残したが、その34%は伐倒や風で失われた。対照区Cは16haで、伐採せず、立枯れ木(10本/ha)もそのままにした。調査は伐採前の2年間(1973～74)と、伐採後の2年間(1975～76)に、5月20日から6月30日の間になされた。

立枯れ木を除去したA区では、つがい数が51%も減少したが、残した2区では23%と38%も増大した。ツバメ

(*Tachycineta thalassima*)のつがい数は、40haあたり20.7から2.2に激減した。ゴジュウカラ(*Sitta pygmaea*)は、A区で半分に減り、B区で22%、C区で50%増した。

非巣穴鳥(Open-nesting birds)のつがい数は、立枯れ木の除去による減少がほとんどなかった。巣穴鳥にとっての最適の立枯れ木は、死んで5年をすぎ、胸径38cm以上で、樹皮が40%以上残ったものである。これらの鳥はたいてい昆虫や小哺乳類を食べ、森林に有益であるから、立枯れ木および低質木被害木を少なくとも7本/haは残したいものである。

原著 V.E. Scott, 1979: Bird response to snag removal in ponderosa pine. *J. Forestry*, 77 (1): 26～28.

前稿「巣穴鳥と立枯れ木」(本誌36号)を参照されたい。

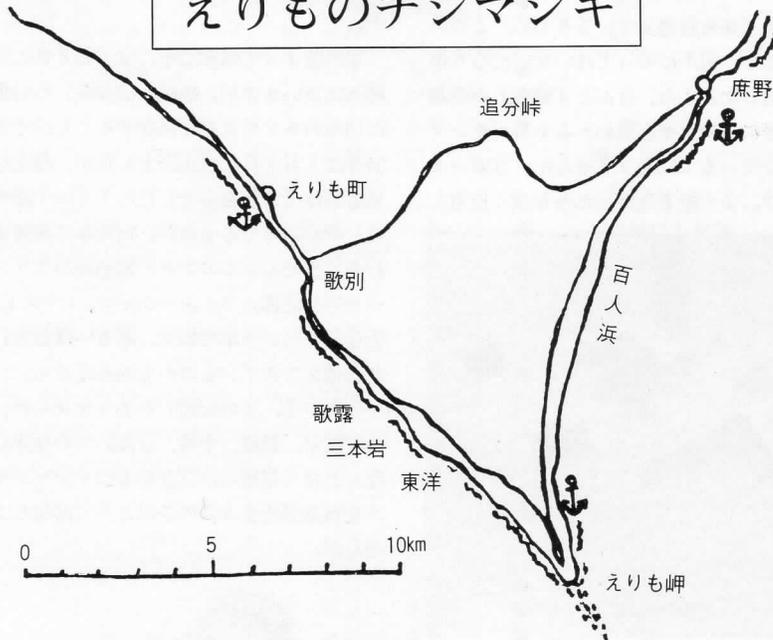
40haあたりのつがい数

種	伐採・立枯れ木除去		伐採・立枯れ木残し		対 照 区	
	(A)		(B)		(C)	
	施業前	施業後	前	後	前	後
ヒ タ キ	4.9	2.8	5.3	6.0	5.6	7.4
ツ バ メ	20.7	2.2	25.4	38.6	14.8	23.4
ゴ ジ ュ ウ カ ラ	16.3	7.6	18.7	22.6	13.6	20.4
キ バ シ リ	1.1	0.6	2.6	0.0	0.0	3.7
ミ ソ サ ザ イ	3.8	5.5	0.6	9.4	0.0	0.0
そ の 他	24.0	15.5	32.9	28.2	26.6	24.7
巣 穴 鳥 小 計	70.8	34.2	85.5	104.8	60.6	79.6
コ マ ド リ	4.4	7.1	9.2	18.0	3.7	4.3
ヒ ヲ ワ	9.3	22.8	10.7	28.7	8.7	16.0
そ の 他	55.3	38.0	48.7	53.4	39.4	44.0
非 巣 穴 鳥 小 計	69.0	67.9	68.6	100.1	51.8	64.3
合 計	139.0	102.1	154.1	204.9	112.4	143.9

施業前 1973～74 施業後 1975～76

中川郡中川町字中川430-40

えりものチシマシギ



佐藤辰夫

この度（日本鳥学会「鳥」1978年、第27巻、第4号）11種の鳥が新たに日本産鳥類として追加されましたが、その中の1種チシマシギ（*Calidris ptilocnemis* Rock sandpiper）について私の観察記録を報告したいと思います。

ここ数年冬休みになると、一度はえりも方面に海の鳥を見に行く事にしていますが、昭和52年は1月の4日に出かけました。晴天だが風強く、波も高いためか、えりも港（えりも岬港ではない）には、コオリガモ、シノリガモ、ビロードキンクロ、クロガモ、ホオジロガモ、ウミウ、ウミアイサなどがはいていました。これらの鳥を観察してから、車の中で昼食をとり、かつてヨクガンを見たことのある西側の防波堤の方へ行ったら、防波堤のかげの凍りついた雪の上に、小形の鳥が20羽ほどうずくまっているのが見えました。スズメかなと思ながら双眼鏡をのぞくと、嘴や体形などからどうしてもシギなのです。脚の黄色が目立つシギなのです。

この寒い冬の日、しかも凍った雪の上にシギがいるという事がどうしても理解できず、何回も双眼鏡をのぞいては、何んというシギだろうかと、頭をひねり、灰色の細胞に刻まれたシギの名をあれこれ口に出してみるので、どれも当てはまるものはありません。シギについてはあまり自信がないので、とにかくよく観察し、メモをとろう。でもその前に鳥が逃げないうちに写真を撮っておこうと、防波堤のかげ、しかも露出計のないカメラな

のでいい写真にはならないだろうと思ながらも、500ミリの望遠で4、5回シャッターをきりました。鳥までの距離は約30メートルで、飛び立つ様子はありません。よく見ると、体の大きさ形はハマシギに似てるがいくらか小さい。脚は短かく黄色。嘴は頭一つぐらいで黒いが、元の方が黄色っぽい。背は黒っぽく、腹は白いが胸やわき腹には黒い斑点がある。眼の上が白く、又時に頭を上げると、のどが白いのもわかりました。これらの特徴の中ですぐ目にはいるのは黄色の短かい脚です。雪の上だからかも知れませんが、よく見ると、まっ黄色ではなく、くすんだ黄色です。（どういわけか写真ではこの黄色がよく出ていなかった。）

時々高波がきて、しぶきがかかると、チョコチョコと少し移動するだけで、又うずくまっています。1時間ぐらい見ていたでしょうか、体が冷えて手がかじかんできたので、メモも写真もとったし、あとで図鑑を見ればわかるだろうと思車にもどりました。

家に帰って図鑑をみましたがのっていません。あるいはと思って、北アメリカとヨーロッパのフィールドガイドを見ますと、それらしいのがありました。Purple Sandpiper と Rock Sandpiper です。夏羽の区別は易しいが、冬羽はよく似ていてむずかしい。Purpleの方が脚の黄色が強いという事で、これではないだろうかと思いましたが、日本の図鑑にも日本産鳥類目録(1974)にものっていないものなので、これは少し調べてみなけ

ればと思いつながらも、その後しばらくそのままにしています。

11月の末になって写真を整理しているうちに、このシギの事が気になりだし、何かのってはいないだろうかと、手持の資料を捜したところ、なんと「野鳥」の昭和50年6月号、8月号にこのシギと思われるものがチシマシギという名でっているではありませんか。日頃パラパラと見るだけで、よく読まなかった事を深く反省し

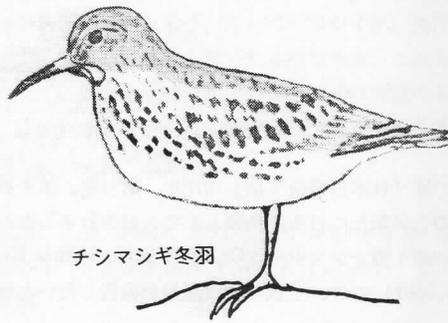


た次第です。体の特徴や分布などをみても、ほぼ間違いなくこのチシマシギです。まだあまり記録はないようです。早速、シギ、チの専門家高野伸二氏に写真を添えて識別をお願いしたところ、チシマシギに間違いはないという返事をいただきました。野鳥の会気付で手紙を出したのですが、丁度事務所に居合せた森岡氏、叶内氏も、写真を見てチシマシギと判定したそうです。又北海道でははっきりした記録としてはこれがはじめてだという事でした。これが昭和53年2月号の「野鳥」に千葉県銚子で

観察されたチシマシギのところで紹介されました。これで一件落着という事になりますが、まだ続きがあります。

年が改まって昭和53年、又1月4日に出かけたところ場所は違いますが、歌露(図参照)の岩礁上で1年ぶりに19羽のチシマシギに再会することができました。昭和54年は1月7日に出かけましたが、残念ながらその姿を見る事はできませんでした。1年に1回の観察では、このシギが毎冬くるものか、何時きて何時までいるのかもわかりません。このシギの繁殖地がアラスカ西北部、シベリア東北部、アリューシャン、コマンドルスキー諸島、千島などという事なので、あるいは毎冬わずかながらも北海道まできているのかも知れません。

今迄、2、3の記録しかありませんが、道内各地(とくに根室、釧路、十勝、日高)での観察によって、このなんとなく望郷のひびきをもつチシマシギの渡りのコースを私達愛護会々員の手によって解明しようではありませんか。



チシマシギ冬羽

〒053 苫小牧市青葉町1丁目1の18 苫小牧西高校内

えぞ鳥獣夜話 - 2 -

古記録の中の鳥獣

安田 鎮雄

『北海道史年表』にえぞ地の記述が姿を現わすのは斉明天皇4年(西歴658年)のことで、「この年阿部臣船師180艘を率いえぞを討つ」また別項で「この年肅慎(みしはせ)を討ち生熊2、熊皮70枚を献ず」とある。今から1321年前のことである。年表は日本書記からの引用であるが、熊は本州の月の輪熊とは別種で、えぞ地から持ち帰ったものと考えられる。

また、延暦21年(802)6月「渡島えぞ入朝し献ずるところの獣皮を私に買取ることを禁ず」とあり、渡島夷人

が獣皮を献上する習わしであったが、このとき王臣諸家が競って良質の物を先に買い取り、献上品が粗悪になるのを防止した。当時からえぞ地の獣皮は声価が高かったようである。

私の勤務する道庁行政資料課には、江戸時代のえぞ地に関する古記録が2千冊以上も保存されている。この中には松前藩の文献も多く、この内容を繰っていると、当時のさまざまな鳥獣の記述に出合っ楽しい。その一端を紹介してみたい。

◆**えぞ地の大蛇** 『新羅之記録』は初期の松前家の事蹟を記した現存する最古の記録であるが、天文3年(1534)4月16日、松前家3代の当主蛸崎義広が上ノ国天の川の南岸から、向い岸を泳ぐ大蛇(うわばみ)を発見、その距離2町余で射止めたと記されている。義広は豪勇の武将で、しばしば夷人と戦いこれを屈服せしめた。この大蛇射殺の一件があってから、義広の弓は全然物に当らなくなったというから、大蛇の祟りがあったものであろう。『松前家記』にも大蛇の記録があり、寛文3年(1663)7月12日、大雨洪水で多くの山が崩れたとき、及部川(松前)にも出たとある。このとき有珠山が噴火し、近傍の海40里が陸地となった。地殻変動の年だったらしい。明治44年7月10日付の北海タイムスに「長さ4間、胴回り2尺5寸の腹の赤い大蛇」の記事がある。札幌区豊平橋約8軒の上流で、7月7日午後2時頃、丸吉牛舎の牧夫武田仙吉が牛の放牧中に発見した。この大蛇はその2~3年前にも出て付近住民を騒がせたとのことである。「嘘かまことか」は会員諸氏の判断におまかせしたい。

◆**ワシ尾に大菩薩の字形** 同じ松前藩の記録『福山秘府』に、永禄元年(1558)夏、北えぞ地で捕獲したワシの尾羽に、広く並べると八幡大菩薩の字形が読みとれたという。このワシ尾は14枚だからオオワシのものである。瑞運のきざしとして紀伊の熊野権現に奉納したが、熊野権現は松前家の守護神である。ワシの尾羽は弓の矢羽根に用いられ、本道の貴重な産物になっていた。産物の中で珍しいのは蝶鮫の皮で、当時の粋な刀のサヤにはこの皮を装飾に用いていた。

◆**鷹で米を買う** 産物の代表にはタカも入る。タカ狩りは遠く仁徳天皇の頃からあったが、全盛は江戸時代であ

る。雌の若タカが上物で、天和元年(1681)には1羽35両と定めた。松前藩は米の代価をタカで幕府に支払ったという。上記の古記録によると、寛永2年と7年(1625・1630)に、白鳥のように白い雄タカが産出し、将軍徳川秀忠に献上された。このタカは大鶴をくじいて将軍を喜ばせた。当時は白い鳥獣が現われると、神の化身と崇められた。たまたま秀忠が逝去すると、一色の白タカは不吉なものとして以後献上を禁じられた。神になったり悪魔にしたり人間は身勝手である。

◆**怪鳥・異鳥** 『松前誌』によると、「元禄11年(1698)9月7日宮島布右衛門怪鳥を見る」と記している。これは松前誌の著者が直接見聞いたことではなく在来の古文書から転記したらしいが、温熱の風が頻に吹き、飛び来たった1羽の鳥が、夜泊していた商船に止る。体長5~6尺、目丸く(眼光鋭くということか)頭毛ちぢれ、鼻とおぼしきところ高く、両翼コウモリの如く、尾長く、二足三指にて爪なし。猫足に似たりとある。『えぞ物産誌』には異鳥と記録されたものもある。元文5年(1740)3月、堀求馬という人が捕獲した鳥は、其の形カモメに似て、くちばし短かく、全身青黒、腹青白で、足のみずかきが三つに裂け、爪が無く、平べったく赤黒色、地に止り立つべき状態に非ずとある。異鳥として扱われているのは幾つかあるが、現在でいう迷鳥、珍鳥を、怪鳥・異鳥と呼んだものであろう。

◆**秦吉了の献納を下命** 福山秘府によると、享保11年(1726)10月25日、幕府からシマフクロウ、秦吉了(サエカ)の献納を命じられた。サエカは九官鳥のことで、南方の鳥であるから勿論献納できるはずはない。この頃ダツタンの馬の購入を命じられているが、えぞ地を遠い異国と同一視していたところが面白い。

植 苗

54. 6. 10 9:00~11:30

鶴 崎 展 巨

北海道にきてもう一年以上になるが、本州にいる頃から憧れていたこちらの草原の鳥たちには昨夏も殆ど接する機会がなかった。今年こそはと思い、この日の参加をずいぶん楽しみにしていた。

列車は約1時間半で札幌から植苗に到着したが、ちっぼけな駅であるにもかかわらず大勢の人が一緒に降りた。見ると皆、本日の探鳥会に参加する人達である。霧雨模様のあいにくの天気でやけに肌寒い。

駅前の舗装道路を暫く歩いて左の脇道に入り、雑木林の中をウトナイ湖へとむかう。エゾノコリンゴの花はまだ開き始めたばかりで、赤味のさした蕾と白い花の対照



が美しい。時々、上空をオオジシギが鳴きながら飛びまわる。道端にはヒメイズイが沢山咲いている。

林を抜ける少し手前でノゴマの声が聞こえてきた。こっそりと近づくと、7~8m先の木の枝に鮮かなルビー色の喉を誇らしげに見せてさえずっているオスがいた。一番見たかった鳥が最初から現わ

れて大歓び。

湖畔の草原に出ると、今度はノビタキ、シマアオジ、ホオアカ、オオジュリンといった鳥たちが次から次へと惜しげもなく姿を見せてくれる。あちらかと思えばまたこちら、双眼鏡を持つ手も忙しい。コヨシキリも姿こそあまり現さないが近くで盛んにさえずっている。

湖にはオオハクチョウが一羽休んでいた。翼を傷めて故郷へ帰る仲間達から置いてきぼりにされたもののだそう。シマアオジの声も余計に哀調をおびて響いてくる。

天候の回復の兆しがなく、非常に寒かったせいもあり予定よりも早く鳥合わせをして駅へ引き返した。短時間ではあっても草原の代表的な鳥の殆どが観察され、大変充実した探鳥会であった。図鑑やテープの声でしか知らなかった多くの鳥たちや、同じく長い間の念願であった自生のスズランの花との出会いなど私にとっては忘れられない一日となるに違いない。

〔記録された鳥〕 アオサギ オオハクチョウ (翼を傷めて飛べない) カルガモ ヨシガモ トビ オオジシギ キジバト カッコウ ツツドリ ヒバリ イワツバメ ハクセキレイ ヒヨドリ ノゴマ ノビタキ アカハラ エゾセンニュウ アキノセンニュウ コヨシキリ オオヨシキリ センダイムシクイ キビタキ ホオジロ ホオアカ シマアオジ アオジ オオジュリン カワラヒワ シメ スズメ ムクドリ ハシブトガラス アカモズ アリスイ 34種

〔参加者〕 岩泉ゆう子 北尾 諭・久勝 鶴崎展巨 天童雅俊 萩 千賀 新宮康生 山村登美 堀内 清 黒田聖子 早瀬広司・富 渡部 幸 富士道真知子 高瀬藤三郎 谷口登志 曾根モト 羽田恭子 宮本勝美 柳沢信雄・千代子 川辺正由 中村佑子 寺屋圭一 高嶋昭英・則子 興野比呂子 東 一郎 野々村 菊 鈴木 勇 金島良子 梅木賢俊 野口正男 33名
〔担当幹事〕 梅木賢俊 野口正男

福 移

54. 7. 1 8:30~12:30

北 尾 諭

福移は、石狩川の河口近く、札幌市街を貫流する豊平川との合流点で、泥炭原野を改良した草地や水田、また堰堤内の小湿原、小沼などから成っています。草原の鳥が主ですが、探鳥会当日は、ほどほどの晴天で、パラエティーに富んだ野鳥が観察されました。

バス停集合直後から、コヨシキリ、エゾセンニュウなどが鳴き、堰堤まで進むにつれ道の両側から、モズ、ノビタキ、ホオアカ、ヒバリ、オオジュリン、ウズラ(声のみ)とつぎつぎに現われ、目的の一つ、ノゴマもその美しい緋色の喉を見せてくれました。堰堤付近では、アカモズ、トビ、それに、白頭のミサゴも現われ、対岸の崖に営巣しているショウドウツバメも、多数上空に飛来しました。

さて、早めの昼食を済ませ、待つこと小一時間、ほぼ同時に二羽のベニマシコが出現、大騒ぎとなり交代でプロミナーを覗き合い、「美しい。」「綺麗だ!」を連発、皆、十分その紅色を堪能したようでした。沼(旧石狩川の月形湖)では、カイツブリなどの水鳥は、見当りませ

んでしたが、近くで、オオヨシキリを見付け、コヨシキリとの違いを確認、沼までの牛糞を踏み、柵をよじ登るという悪路の甲斐がありました。残念ながらシマアオジは、現われませんでした。前回のウトナイで多数見ているので諦めることとしました。

最後に、ひとつ印象に残るのは、川辺の繁みに、番い(?)のヒガラがいたことです。雄大な石狩川と小さなヒガラの取り合せに、自然の妙を感じました。

〔記録された鳥〕 アオサギ ミサゴ トビ ウズラ イソシギ オオジシギ キジバト カッコウ アリスイ ヒバリ ショウドウツバメ ハクセキレイ モズ アカモズ ノゴマ ノビタキ アカハラ エゾセンニュウ シマセンニュウ マキノセンニュウ コヨシキリ オオヨシキリ ヒガラ ホオアカ アオジ オオジュリン カワラヒワ ベニマシコ スズメ コムクドリ ムクドリ ハシボソガラス 32種 解散後アカゲラ ヨシゴイ

〔参加者〕 岩泉ゆう子 島田明英 谷口登志 曾根モト 早瀬広司・富 高嶋昭英・則子 北尾 諭 野口正男 柳沢信雄・千代子 菅野寿衛吉 新妻 博 宮本勝美 鈴木 勇 新宮康生 羽田恭子 18名
〔担当幹事〕 野口正男 羽田恭子

鷓 川

54. 8. 26 9:40~14:00

屋 代 育 夫

今までに野幌森林公園で行われた探鳥会には二、三度参加したことはあったが、それ以外の地域は始めてなので、どんな鳥に出会うことやらと期待しながら今回の探鳥会に参加した。

札幌7時40分発様似行急行列車に乗り、約1時間30分で鷓川駅に着く。太陽がボンヤリ見える曇り空。風はほとんどない。駅から歩いて約10分で広々とした牧場の入口に着き、そこで幹事の羽田さんから簡単な説明があった。牧場の中を歩き出すと、まず最初に数羽のカワラヒワが頭上を横切った。柵の上にトビが、木の枝にハクセキレイの幼鳥が、ヒバリが、と教えられるたびに双眼鏡でのぞく。アオサギは悠々と飛んでいた。

鷓川河岸に着き、対岸や中州にいる鳥の種名と特徴を聞くが、私のような初心者にとっては、区別するのは容易なことではない。河口から右に進み、干潟に出て、ここで昼食。その後、各自観察を続けているとヘラシギがいるという。望遠鏡をのぞかせてもらうと、嘴の先端がヘラ状の小さな鳥が忙しそうに動きまわっていた。次の人がのぞくともう見えなくなってしまうと言う。その他、メダイチドリ、オバシギ、トウネン、オグロシギ、キリアイ、ムナグロ等々。

帰り道、一羽のホウロクシギが私たちを楽しませてくれたし、牧場の馬たちも物珍らしそうに寄って来て、挨拶をしていった。シギ、チドリを見ることがほとんどなかった私にとっては、今回の探鳥会はたいへん成果があったようだ。今度出会った時には、どこかで見たことがある、と言えるかもしれないのだから。

これからも機会があるたびに探鳥会に参加したいと思っている。

〔記録された鳥〕 アオサギ マガモ カルガモ トビ シロチドリ メダイチドリ ムナグロ ダイゼン トウネン ヒバリシギ ハマシギ オバシギ ヘラシギ キリアイ アオアシシギ タカブシギ ソリハシギ オグロシギ オオソリハシギ ユリカモメ オオセグロ

カモメ ウミネコ キジバト ヒバリ ショウドウツバメ ハクセキレイ ホオジロ カワラヒワ スズメ ムクドリ ハシボソカラス 31種、(解散後 クサンギ イソシギ ホウロクシギ 河口に残った人々は、エリマキシギ チュウシャクシギ アジサンをみました。)

〔参加者〕 屋代育夫・美江子 岩泉ゆう子 沢田昌広・幸恵 宮本勝美 曾根モト 鈴木武雄 谷口一芳・登志 萩 千賀 笠井照子 山崎靖子 山本 一天童雅俊 鷺田善幸 平野 勇 鈴木 勇 柳沢信雄 羽田恭子 上坂登・智裕 村瀬 篤 北尾 諭 照井洋子 山田 清 鶴崎展巨 中野 進 渡辺紀久雄 高瀬藤三郎 島田明英 早瀬広司・富 33名

〔担当幹事〕 柳沢信雄 羽田恭子

札幌市内でゴチハヤブサが営巣

会員の山本一さんが確認

札幌市内では営巣はおろか姿を見ることがも珍らしくなったチゴハヤブサの巣が今年6月市内の創成川のポプラ並木で確認された。発見したのは山本一さんで毎朝のように早起し付近の野鳥を観察しカメラに収めていた。

5月末ごろからポプラ並木でギャー、ギャーと鳴く鳥に気づいていたが気にもとめずにいたところ、巣の近くで畑仕事をしている人から「あの鳥がカラスを巣から追い出したのを見た」という話を聞きカメラに収め確認したところチゴハヤブサだった。

巣が確認されたポプラ並木は北区屯田の国道沿いに流れる創成川の右側に約2.5km続いているもの。昨年までは川をはさんで両側に並木があり囲いの田園風景ともよくマッチし北国らしい景観を呈して市民にも愛されていたが、昨年の河川改修工事で左岸のポプラ204本がバッサリやられ心有る人をガッカリさせた。今年に入りさらに右岸伐採の話が持ち上がったが付近の人達の反対もあり



何とか伐採をまぬがれた。

このポプラ並木を含めこの地区は恵まれた水と緑が残されているためカッコウイソシギ、シマアオジなど野鳥にもかっこうの生息地となっている。山本さんをはじめ、近所の人々は「ポプラを残して本当に良かった」とチゴハヤブサの営巣を喜んでいる。

チゴハヤブサの観察記録

○：確認できた
×：確認できなかった

観察月日	確認の有無	観察月日	確認の有無
6月15日	抱卵確認	6月23日	○
〃 16日	○	〃 24日	○
〃 17日	×	〃 25日	○
〃 18日	○	〃 26日	×
〃 19日	○	〃 27日	×
〃 20日	○	〃 28日	○
〃 21日	×	〃 29日	○
〃 22日	○	〃 30日	○



冬鳥の季節です。55年1月までの予定をお知らせします。防寒の用意をしてお出かけ下さい。

＜ウトナイ湖＞

とき 54年11月18日
午前10時

集合 ウトナイ遊園地、中央バス、ウトナイ下車。
ガン、カモ、ハクチョウなどの水鳥の観察。

＜小樽港＞

とき 54年12月9日 午前10時

集合 国鉄小樽駅待合室
小樽第3埠頭から船に乗り、港内の水鳥観察

＜藤の沢＞

とき 55年1月27日 午前10時

集合 札幌市南区藤の沢2区、白鳥園
電話 591-8317

小鳥の村、小沢氏宅の給餌施設に集まる鳥を室内からみます。

交通 定鉄バス、定山溪線「藤の沢」下車、白鳥園まで徒歩20分。札幌駅前から藤の沢まで約40分。合計1時間。

持ち物 昼食、観察用具。

参加費 200円 雪が降っても行きます。

＜野幌森林公園を歩きましょう＞

上記のほかに、次のように探鳥散歩を行います。どうぞご参加下さい。

とき 54年11月3日、12月2日

集合 午前8時30分 大麻駅待合室

☆ いずれの探鳥会も、昼食、筆記用具、観察用具等をご持参下さい。

☆ 探鳥会についてのお問い合わせは

柳沢851-6364か羽田611-0063へ。



＜北国の野鳥写真展＞

去る6月6日から6月18日まで、札幌駅前の三菱信託銀行ロビーで開催されました。

4切から半切までの写真パネルが41点、谷ロー芳画伯シロフクロウ、コミミズクのリトグラフ2点、それぞれ森、草原、水辺のコーナーに分けて展示されました。

手前みそですが、あっさりした展示の中に、ひかる作品が多く、多くの人に好評を博しました。

また折から、ウトナイで、日本野鳥の会全国大会が開かれていて、全国の会員の方が批評に見えたり、新聞やテレビにも紹介されたり、また、もっと出品者の輪を拡げたらどうかという声もありました。今回の出品者は次のとおりで、ほかに多くの方から励ましやお力添えをいただきました。また直接の開催には三菱信託銀行、特に松沢課長の絶大な御協力を得ました。

出展者(順不同) 平井さち子 長井 博 猪口 卓
宮木雅美 野村梧郎 木内 栄 柳沢信雄 梅木賢俊
萩 千賀 村野紀雄 (村野記)

＜土屋副会長が豆本出版＞

当会の副会長、土屋文男氏が3冊目の豆本「赤い鳥ことり」を出版し当会にも寄贈されました。

土屋氏は皮膚科のお医者さんで、札幌市で開業しておられますが、野鳥の研究家としても有名です。この度の豆本「赤い鳥ことり」はウトナイ湖での野鳥の会全国大会、サンクチャリーのウトナイ湖決定を記念して出版されたものです。

本は15章から成り、^ニ中西悟堂先生の体操、^ニカッコウの鳴かなくなる日、^ニピンクの十姉妹、^ニヨーロッパの鳥たち、^ニ沖繩の愛鳥記念、などで今古東西の鳥に関するエピソード、野鳥の保護に対する氏の考え方がこれまでの深い経験と科学者としての目を通して簡潔で味深い文章で綴られています。

カットは当会の幹事で全道展会員の谷ロー芳氏の作品です。これもこの本の魅力の一つになっています。

本に関する問い合わせは下記の所をお願いします。

☎ 064 札幌市中央区南29条西12 土屋文男

(頒布価：1,500円 冊：200円)

目 チェックリストだより 目

「チェックリスト」の集り具合は一部の方を除いて全体的にあまり良くありません。意外なことに札幌など大勢仲間のいる所の方が悪いようです。リストはその時々、その場所で処理してしまわないとせっかくの探鳥記録も埋もれてしまいがちです。こまめに書いて会の方にお寄せ下さい。数年後には立派な記録として残るはずです。

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

今回の編集を担当しましたが、地方の会員の原稿が少なくて残念です。札幌からの一方通行ではなく、全道各地の情報を盛り込み、会員みんなの野鳥だよりにしたいものです。編集担当幹事の間でも具体的な原稿集めの方法を検討しています。どのような原稿でも歓迎しますので気軽にどンドン投稿して下さい。 小堀焯治

☎ 006 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付
電話 (011) 251-5465番 郵便振替 小樽18287